

慶谷先生の学問

中村雅之

2009年に吉池孝一・竹越孝両氏とともに、慶谷壽信先生の論文集「有坂秀世研究——人と学問——」(古代文字資料館発行)の編集・発行にたずさわった。慶谷先生は有坂秀世を敬慕し、研究者としての後半生をほぼ有坂の生涯と学説形成の追究に費やしたとも言えよう。中国語音韻史の研究者であった慶谷先生は、自らの研究以上に、有坂秀世の生涯を世に知らしめた人として名を残すことになったが、そのことは本人も決して不本意ではなからうと思う。

慶谷先生の研究上のモットーは、常に **exhaustive** であれ、というものであった。燃料が空になるほど限界まで調べ尽くし、頭を働かせよ、というわけである。極端なことを言えば、その対象は何でもよかったのではないか。先生は、初期の論文では入声韻尾の消失過程を論じたが、その後は仏教文化と中国語学の関連、近世の韻書、歌戈魚虞模古読論争、国際音声字母の中国流の受容など、様々な方面へと関心が移った。**exhaustive** な調査研究をおこなえば、対象が広がるのは必然である。

その中で最も長期にわたって取り組んだのが有坂秀世という希代の言語学者の研究であった。生涯の半ばを病床で過ごし、文字通り命を削って研究を進めた有坂秀世は音韻論、日本語音韻史、中国語音韻史の各分野にわたって多くの功績を残した。発想の豊かさと洞察力に富む論文の数々は今なお読むものを魅了する。慶谷先生は若い頃から有坂の学問を一つの高みと見定め、傾倒した。

『有坂秀世研究——人と学問——』の中に、「上代特殊仮名遣研究史の概略」という文章が収められている。これは都立大退職後の赴任先である長崎外国語短大で2000年に学生向けに書かれたものであるが、その故か、他の論文では見られない記述がある。以下にその一部分を引用しよう。(下線は引用者)

上代特殊仮名遣の研究史は、宣長を出発点として説かれることが多いが、私自身としては、帰納的に実証した龍麿の労力を重んじ、この件に関して宣長をあまり評価するつもりはない。言語の研究というものは、名人芸の上に成り立っているのではない。気づかれる際立った特徴だけをとりあげるのではなく、際立たないものも、すべてを含めて、体系全体をとりあげるべきものなのである。

これは、本居宣長が『古事記傳』において、同音でも語ごとに仮名の書き分けがあることを指摘しているのに、用例を散発的にしか挙げなかったことに不満を述べている箇所である。つまり、宣長のやり方は **enlaustive** でないということなのだろう。ただし、「この件に関して」(＝上代特殊仮名遣いに関して) 評価しないということは、他の部分では宣長を評価していたということでもある。

中国の学者では、王国維と趙元任の学問に特別な思い入れがあったようだ。二人とも 1920

年代に清華大学に招かれ、陳寅恪・梁啓超とともに四大導師と称された天才肌の学者である。王国維の論文集『觀堂集林』は先生のお気に入り、授業でも何度か演習のテキストになったことがある。確かにその該博な知識と明晰な論理展開は感動的ださえある。

趙元任については、おそらく入声韻尾の消失過程を論じる際に用いた『湖北方言調査報告』が注目するきっかけかと思うが、都立大での最終講義を文章化した「国際音声字母の中国流の受容」(2000年)で、IPAの中国独特の受容に関して趙元任の果たした役割を明確にするなど、趙元任には常に関心を持ち続けていた。その最終講義にいう。(下線は引用者)

中国の初期の音声学書、ないしはそれに準ずる書は、国際(または万国)音声字母と中国語音声との同定(identification)にも苦勞して、一般にそのとりあつかいに成功しているとはいいがたい状況にある。上あご上の¹どの位置(sthana)と舌の上の²どの器官(karana)とで調音されるかということは、ある程度わかっていた。また、ある程度わかるはずであった。しかし、処理のしかたが不手ぎわな人が多かった。このような状況からすれば、舌尖三分、舌面三分のあざやかな処理には、趙元任ほどの人を必要としたのである。

また、上の引用文の直前には次のような文がある。(下線は引用者)

1998年秋の日本中国語学会大会における平田昌司氏の発表「近代演劇と文法学一『目』の文学革命・『耳』の文学革命」でも、主役は趙元任であった。よくよく主役に生まれついた身であった。

この部分は前後の文章とは何の脈絡もない。おそらく口頭での最終講義ではもう少し説明があったのであろうが、文章では意味不明である。しかし、慶谷先生が趙元任を相当に評価していたことだけはうかがえる。

有坂秀世、王国維、趙元任といった学者たちの尋常ならざる才能に対して、慶谷先生はexhaustiveな調査研究によって近づこう、あるいは対抗しようとしたのではないか。

『有坂秀世研究——人と学問——』の「あとがき」で先生は、「これまで、私のしごとは無視されつづけて来た、と自分ではそう思っていたが、身近にいた教え子諸氏が私を評価してくれていたとは、予想外のことであった。」と記している。この場合の「私のしごと」とは有坂研究のことである。自分の研究をせよになぜ他人の評伝に精を出しているのか、という批判が——実際にはなかったであろうが——あってもおかしくないと考えていたのかも知れない。しかし、やめることはしなかった。有坂に私淑していたからというだけではなく、exhaustiveであることが信念であったからである。そして、我々弟子たちが敬服していたのも、そのような研究態度にほかならない。

有坂秀世にとって学問こそが生きる証であったように、慶谷先生にとっても調査と研究——先生は研究ではない、勉強だと言うであろうが——こそが、自らの存在理由であった。

¹ 原文は「舌の上の」であるが、ミスプリとして正した。

² 原文は「上あご上の」であるが、ミスプリとして正した。